W・S・ギルバート

8　「ナンシー・ベル号」奇譚

あれは地元の海岸でのこと
　ディールからラムズゲートまでの間だ
岩の上に独りで座っている男を見つけた
　年老いた海軍の男だ

髪はひょろひょろ　髭は長くて　5
　草のようにひょろ長いやつだった
この男が岸辺で話すのを聞いたんだ
　不思議な暗い調子でな

「ああ　俺は料理人で　勇敢なキャプテン
　ナンシー号の航海士で　10
ケチな甲板長　航海士候補で
　キャプテンの賭博仲間たちなのさ」

男は両こぶしを振り回したり　髪をかきむしったり
　しまいにゃ　俺はそら恐ろしくなってきてよ
こいつぁ　酔っ払ってるとしか思えねぇだろ　15
　だから俺ははっきり言ってやった

「なあ　おっさん　俺にはちっともわかんねえや
　海の男たちの仕事ってもんはよ
わかるんなら自分の手を食っちまってもいい
　どうやったらなれるっていうんだい　20

いっぺんに料理人で　勇敢なキャプテン
　ナンシー号の航海士で
ケチな甲板長　航海士候補で
　キャプテンの賭博仲間たちにさ」

そしたら　おっさんが自分のズボンをぐっと引き上げて　25
　海の男たちみんながやるやつさ
噛みタバコをペッと吐き出し
　このひでぇ与太話を始めたんだ

「ナンシー・ベル号っちゅう立派な船で

　　俺たちゃインド洋へ船出したんだ　30
だが悲しいことに座礁しちまってよ
　　まあ俺にはよくあったことさ

そんで仲間はほとんど溺死よ
　　（七十七人いたんだがな）
ナンシー号の男たちで　たった十人　35
　　乗組員点呼に「ここだ」と答えたのは

いたのは俺と料理人　勇敢なキャプテンと
　　ナンシー号の航海士
ケチな甲板長と　航海士候補と
　　キャプテンの賭博仲間たちさ　40

丸々ひと月　飲みもんも食いもんもねぇから
　　腹が減ってどうしようもなくてよ
だから　くじを引いて　アタリを決めて
　　キャプテンが俺たちの食いもんになったんだ

次のアタリくじはナンシー号の航海士　45
　　やつはうめぇ飯になってくれた
お次は航海士候補で俺たちの腹を満たし
　　残ってるのは七人だ

その次はケチな甲板長を殺（や）った
　　やつはほんと豚みてぇな味だった　50
そんでもって料理長と俺は好きなだけ食ったんだ
　　キャプテンの賭博仲間たちをな

とうとう残ったのは料理長と俺だけ
　　それでこの難問が持ち上がった
「どっちが釜に入るか」ってね　55
　　それなりに議論をしたさ

俺は料理長を弟のように好きだった　まじだって
　　料理長も俺のことを尊敬してたさ
だがどっちかがもう一方の胃袋に詰め込まれるってんなら
　　話は別だ　わかるだろ　60

トムがいう「俺が食いもんになろう　お前が俺を食おうってんなら」
　　だから俺は「わかった　お前がそういうんなら ―
友よ　俺が死ぬことになったら俺を煮てくれ」

　　そしたらあいつが「じゃあそうしよう

だってジェイムズ　俺を殺すなんて　65
　　そりゃあ馬鹿げた話さ
だってお前は俺を料理できない
　　俺はできる　いや必ず　お前を料理してやる」

そうして　あいつは湯を沸かし　いい塩梅（あんばい）に
　　塩と胡椒で味付けする　70
（慣れたもんさ）それに刻んだエシャロットに
　　セージとパセリも加えるんだ

「こっちへ来い」あいつは内心自信満々さ
　　あのほくほく顔を見りゃすぐわかる
「お前に食わしてやりてぇなあ　75
　　お前はいいにおいの飯になるぜ」

そういってあいつはぐるぐるぐるぐる鍋をかき混ぜ
　　ぐつぐついう出し汁をくんくんかいだ
その時　俺はあいつの足首を掴んで　その叫び声を
　　沸騰する出し汁の泡で消してさ　80

俺はその料理を一週間かそこらで食う
　　そして ― 食ってる間に
やつの最後の骨付き肉を　落としそうになる
　　ちゅうのも一艘の船が見えるんだ

　　*　　*　　*　　*　　*

俺は泣きもしねぇし　笑いもしねぇ　85
　　楽しみもねぇし　遊びもねぇ
ただ座ってしゃがれ声で話すのさ　たった一つ
　　俺が持ってるふざけたネタをよ　つまりさ

ああ　俺は料理人で　勇敢なキャプテン
　　ナンシー号の航海士で　90
ケチな甲板長　航海士候補で
　　キャプテンの賭博仲間たちなんだって」

（三木菜緒美訳）